テニスンと海洋河川に関する一考察

岡　沢　　武

洋の東西を問わず，何れの時代の詩人たちも，自然を敬し人を愛して，この自然と人の中に inspiration, imagination, creation の生因を求めたことは言うまでもないが，中でも詩人 A. Tennyson のように，自然の中でも特に waters（海・湖・河）を愛し，これを求めて放浪的な旅をした詩人は稀である。彼は15—6才の少年時代から82才の老令に達するまで，終世 waters を求めて各地を放浪的な旅をし，そしてこの旅行から詩材と詩想を摂取したのであった。彼のこの放浪的な旅行癖は，彼が Louth の Grammar School に入学した頃からすでに始まり，Cambridge に入学してますます旺盛になり，そして父の死後 Sombersby の生家である牧師館を立ち退くに至って頂点に達し，そして彼が死するまで衰えを見せなかった。すなわち，彼の国内に於ける小旅行（放浪という方が適当であろう）は別としても，国内国外に於ける顕著な旅行はその数20回近くに達している。

これを年代順に見るならば，

1. 1830年（21才）親友 Arthur Hallam との Pyrenees への旅
2. 1831年（22才）同じく Hallam との Rhine の旅
3. 1835年（26才）友人 Spedding との Lake Country の旅
4. 1848年（39才）Bude へ Arthurian Legend をたずねての旅
5. 1852年（43才）弟 Charles を伴った Scotland への海浜と植物の研究の旅
6 1858年（49才）Scandinavia への旅

7. 1859年（50才） Lisbon への旅
8. 1860年（51才） Cornwall の旅
9. 1861年（52才） Pyrenees の旅
10. 1864年（55才） フランスの Brittany への旅
11. 1865年（56才） 大陸巡遊の旅
12. 1867年（58才） Devon 東海岸の徒歩旅行
13. 1869年（60才） Switzerland の旅
14. 1871年（62才） Paris への旅
15. 1873年（64才） Italy の旅
16. 1874年（65才） France の旅
17. 1879年（70才） Venice への旅
18. 1883年（74才） 北国巡遊の旅
19. 1887年（78才） England 西部海岸巡航の旅

などがある。

しかしこの間においても，彼は1837年（28才）には母とともに Somersby から Epping の High Beech に転住し，そしてここに1840年（31才）まで住居し，それから更に1853年（44才）に Wight 島の西海岸 Farringford に移転してここに定住するまで，この間約10年間は，或は親戚に身を寄せ，或いは知己友人の世話になるなど，転々居を移して全く放浪的な生活をしたのであった。

かかる彼の放浪的な旅行癖は，一体どこから来たのであろう。もちろん彼も他の大方の詩人たちと同じように，生来旅行好きであったことは想像に難くないが，またその昔，Denmark から Humber 河の北部に移住して来た彼の先祖の放浪的な血筋をうけているためでもあったとも考えられる。

しかし私は，彼のこの旅行癖を次の二つの原因に帰するものである。すなわちその一は，彼生来の内攻的な非社交性であり，その二は，彼の幼年時代の家庭環境と少年時代の学校環境とであるとするのである。しかして彼のこの孤独を愛する内攻的非社会性と家庭・学校の生活環境とは，結果から見て，二者ともに因果関係にあるものであって，人里を遠く離れ，自

然以外には交るものとてはない Somersby の寒村の牧師館の父母兄弟のみの楽しい家庭生活は，父からここで大学と同じ程度の古典語学・数学の指導をうけて来た彼にとっては，大学生活は予想に反して単調・凡俗なものに感じられ，その上教授の指導も学生の生活も，彼には打算的・享楽的に思われたのであったが，この気持ちにかてて加えて「自分は他の大方の学生とは異って田舎出である」という劣等感にも似た一種の感情が，彼をしてますます孤独を愛し非社交的にならしめたものと思われるのである。彼が大学入学直後に叔母にあてた手紙には，

『……私はいま部屋の中にフクロウのようにうずくまって，淋しく坐っています。私と空の星の間には，ただいくつもの屋根が見えるばかり。下からは馬蹄の音，車の音，酔いどれ大学生や街行く人の喚声が，海の波音のように聞えて来ます。……この辺はあまりに平凡すぎます……頭の乾枯びた打算的な，こちこちの学生のみが楽しく暮せるところです』云々と述べている。

思うに，大学生活に対するこうした彼の不満と，これが誘因である彼の孤独感とは，もともと Somersby に於ける一家団欒の楽しい家庭生活に対する愛着がその誘因となったものであるが，これは彼をして反動的に大学生活を無味乾燥に感じさせ，そして自然美を求める心をかき立てて，ついに放浪的旅行をなさしむるに至ったと思われるのである。

されば，かかる彼の幼年時代の家庭生活環境はどんなものであったであろう。彼が生れた牧師館は Lincolnshire の一寒村 Somersby にあったことは前述したところである。この村は Lincoln 丘陵のはるか東のはてにあり，500 呎を越す丘陵が幾重にも重っている高原にあった。当時は耕地とてはない全くの不毛の地であって，野兎・野鳥などが至るところに出没していた。牧師館は丘と丘とが出会った海抜 150 呎の美しい谷間にあり，この谷間には清い渓流が潺々の音を立てて流れていた。丘や谷の斜面には杜や林が点在し，その中に，中世紀の遺物とも見える古い教会堂が立って

いた。また村と村との間には，白土や煉瓦で囲まれた古い農場があり，その傍には16—7世紀からの領主の邸宅が散在していた。東の丘陵を越すと，そこには沼沢と広い牧草地があり，この牧草地は広い濠によって幾つもの畠に区切られていた。ここを更に東に行くと，北海の海岸 Mablethorpe beach に出る。ここは英国でも，潮の干満の差がとくに激しいところであって，Tennyson が *Ensch Arden* の巻頭に

> Long lines of cliff breaking have left a chasm;
> And in the chasm are form and yellow sands.

と歌っている通り，断崖絶壁が海浜近くまで迫り，この断崖の裂け目からは小川が滝つ瀬をなして注いでいる絶勝の地である。そしてここには白砂あり，青松あり，沖を通う船あり，また風が荒れて海が狂うときは怒濤咆哮，凄壮な容相を呈するのである。彼はこの海浜に絶えず心を惹かれ，勉学の余暇には単身か家族とともに必ずここを訪ねて，常に詩想を養ったのであった。彼が Louth の Grammar School を卒えて Cambridge に入学する時であった。故里を去る離郷の情に堪えず

> What shall sever me
> From the love of home?
> Shall the weary sea,
> Leagues of sounding foam?
> (from *Home*)

と歌ったほどに，この海浜に心を惹かれていたのであった。また，彼が幼年期を送った牧師館は，彼等一族の楽しい団欒の城であって，兄弟が起居した子供部屋は大して広くはなかったが，南に明るい出窓があり，この窓には忍冬の蔓が網の目のように交錯して匍い上っていた。また食堂は広く，美しいゴシック式の天井が張られ，窓には赤・青・黄の色ガラスがはめられていた。客間は狭く質素であったが，広い芝生に面した心地よい部屋であって，本棚と黄色いカーテン・ソファー・椅子などが整然と備えられて

いた。広い芝生の片隅にはエルムの木が立ち，このエルムと向い合って落葉松や無花果の木が立ち茂っていた。そして芝生の彼方には，彼が幼年の頃歌ったいわゆる

A spirit haunts the year's last hours
(from *Song*)

の小径があり，この小径を行けば芝生を囲む桓根のように，百合，ばら，たちあおい，ひまわりなどが，美しく咲き乱れていた。庭はこの花壇の先から除々に低くなり，そして茨や蘚や無忘草が繁茂する荒野につながり，その中を清い小川が潺々の音を立てて流れていた。彼が1853年に賦した絶唱 *A Farewell* はこの小川に献じたものであって

Flow down, cold rivulet to the sea
　Thy tribute wave deliver:
No more by thee my steps shall be,
　For ever and for ever.　(St. i)

云々と，牧師館を去るに当って別離の情を歌っている。

庭の横手には，こじんまりした果樹園があった。幼年の彼が払暁に起きて，珠玉のような落ち林檎を拾ったところである。またこの近くに林におおわれた Holywood の窪地があり，この窪地の岩かげから清い泉が渾々と湧々出していた。彼が14才のとき Byron の死を聞いて 'Byron is Dead' と涙ながら書き記したのはこの岩である。

こうした美しい恵まれた家庭環境は，知的にも情的にも，彼の生得の詩的感情をますます豊かにしたことは言うまでもないが，同時に，これは平凡で単調な大学生活に対する不満と嫌悪の情を深め，そしてこれから逃避しようとする心を刺戟し，ついに彼をして孤独に陥らしめて，心を他の素朴な人間美，自然美に向けさせて，これを求めて放浪せしむるに至ったと見るべきである。

かくして彼が歩きまわった旅行地は，前表でも解るように，主に waters

の美しい場所に集中している。不断に訪ねた Mablethorpe の海岸はいうまでもないが，前後3回にもわたって訪れた西・仏国境の Pyrenees にしても，処女雪をいただくここの山嶺の美しさや，親友 Hallam の懐かしい思い出に惹かれたためでもあったが，それ以上にここの幽谷 Cauteretz の渓流の美しさに心を惹かれるという強い誘因があった。また1835年の Lake District の旅にしても，Windermere その他の湖の美景を求めてのことであり，1848年の Bude の旅も，彼がかねてから願っていた "be alone with God" の境地を求めることと，海に関係深い Arthurian Legend を探る目的であって，宿に入るやいなや，案内の女中に "Where is the sea? Show me the sea!" と性急に叫んでいるところを見ても解るのである。また1852年の Scotland の旅では，Whithy から Grasby に出てここの断崖絶壁の海岸を踏査し，1858年の Scandinavia への船旅では高濤狂乱の海上で，彼一人甲板に残って猛けり狂う海の情景に見とれたのを見ても解るのである。彼はこの時の情景を *Lancelot and Elaine* の中の Lancelot の突撃の中に次のように隠喩している。

> As a wild wave in the wild Northern-sea,
> Green-glimmering toward the summit, bears, with all
> Its stormy crests that smoke against the skies,
> Iown on the bark, and overbears the barh.

云々と。更にまた1859年の Lisbon への旅では，あえてフランス縦断の陸路をとらずに終始船旅を選び，また1860年の Cornwall の旅では徒歩で Lizard から Lands End に出て，ここの浜で水に潜ること数日，更に Scilly 諸島に渡って Lyonesse の伝説をさぐっている。また1864年の Brittany の旅，1867年の Devon 東海岸の旅（これも徒歩旅行），1869年の Switzerland，1879年の Vennice への旅等々，みなその主目的は waters を求めることであった。

また，彼のこうした海に対する関心は，彼が1853年に永住の地として選ん

だ Farringford を見ても解るのである。

Farringford は Wight 島の西海岸，いわゆる辺境の地にあり，当時は London から Brockenhurst まで汽車で行き，それから Lymington まで馬車を用い，更に船で80哩の Solent 海峡を渡らねばならぬところであった。彼が居所と定めた家は George 王朝時代からの古い家であって，その昔，修道院があったという古跡の近くに立っていた。小庭園と2—300エーカの農場とがこれに属し，家はその中央にあった。農場には，昔僧侶たちが名づけたという名前がそのまま残っていて，Abraham's Mead; St. George's Field; Clerk's Hill; Maiden's Cropt などの名で呼ばれていた。またこの家は建築主の伝統を重んずる心から，大きな窓や木造部はゴシック式に作られ，伝統と因習とが美しく保存され，一種異様な雰囲気をかもし出していた。15もの部屋がある大邸宅で，昔信号所があったという小高いところにあって，暑い夏の日には，海からも谷からも涼風が吹き上げて来て，凌ぎやすい家であった。また北は一衣帯水 Solent 海峡をへだてて英国本土の海岸を一望の中に納め，また応接室の窓からは，東に Freshwater Bay 越しに小さな入江が不断につづく海岸と，ばら色をした岬とが見える。こうした眺望絶佳のところであるが，外部からはすっかり隔離され，家の北と南側には松・楡・柊・月桂樹などの林があり，その林間には待雪草・ちぎたりすなどの花々が一面に咲き競うのであった。そして西側すなわち家の裏には，楡の木が帯のように立ち並び，その彼方の斜面には，野菜や切花用の花壇が鄙びた桓根に囲まれていた。また南側は海に面し，一哩ほど先には500呎もあろう High Down が白堊の肌を現わしていた。またこの辺は隼(はやぶさ)・まぐそたか・犬からす・小がらす・わたりがらす・その他海鳥の棲息地でもあって，野鳥・野草・蝶などには天国とも言える人跡未踏の自然の園であった。

ここにおける Tennyson の生活は，Somersby の生活と同じ様に，家族ばかりの楽しいものであった。London からは海を隔てて可なり離れて

いるので，招かざる客は訪れず，訪れるものは家族同様の親しい友か，さもなくば万やむをえない用件をもった人々のみであった。Tennyson は執筆の暇を見ては庭いじりをする。隣人農夫の手伝いをする。また静かな日にも嵐の時にも，高い絶壁の上や Freshwater Bay の砂浜や Brook Sands から海をじっと眺めて悦に入る。また夜は怒濤の声をきき，砂礫のきしる音に耳をそば立てながら海浜を一人歩きまわった。また静かな夜には，漁夫や海岸警備員と海に漕ぎ出ることもあった。

さて，こうした Farringford における彼の生活は，前述の Cambridge における生活とともに，彼の孤独性・避社交性・waters に対する偏好性を明確に示しているものであるが，同時に彼の High Beech における生活，更にまた彼が旅行には（一二の例外はあるが）必ず親友か家族以外の者は同伴しなかった事実なども，彼のこの性向を最もよく示しているものと思われる。そしてこの孤独性と避社交性は，彼を煩わしい外部との社交的絆から全く解放し，随時随所，心の赴くまま自由に彼の好む waters を探らしめて，これから詩想と詩材を摂取させたのであった。

Waters に取材した彼の作品は数多いが，その中の代表的なものを拾うならば次のようなものがある。すなわち

Columbus; The Mermaid; The Merman; The Kraken; The Sea-Fairies; Edwin Morris (or *The Lake*); *A Farewell; Break, Break, Break; Enoch Arden; Sea Dreams; Sweet and Low; In the Valley of Cauteretz; The Sailor Boy; Crossing the Bar.*

など。しかしこれらは，その標題でも解るように，彼が主に waters に関するものを主題としたものであって，これによって直ちに彼を「waters の詩人」と断ずることは早計である。これよりむしろ重要なことは，彼が作品の到るところに隠喩・対照・頭韻・母韻・子韻・声喩など巧みに用いて waters を叙述しているところにある。この叙述を彼の作品全般にわたって見ることは，ここでは紙面が許さぬ故に，ここでは彼の少年時代の作

The Lover's Tale と，晩年の作 *The Passing of Arthur* について見ることにする。これら二作をここに敢て取り上げた理由は，前者は彼が未だ未熟であった少年期の作であって，彼の少年時代の心情を最もよく表わしていると思われるからであり，また後者は彼の成熟しきった晩年すなわち60才の作であって，芸術的・社会的諸経験を充分に重ねた彼の心情を最もよく表わしていると考えられるからである。

The Lover's Tale は4部1281行から成る作品。従姉妹であり乳姉妹である Camilla に失恋した青年 Julian が，彼の苦衷を物語る物語詩である。また *The Passing of Arthur* は *Idylls of the King* の最後編であって，440行から成り，甥の Modred との戦いで致命傷をうけた King Arthur が，Round Table の最後の生存者 Bedivere に命じて，妖術師 Merlin から授けられた名剣 Excalibur を湖の主に返させて死んで行く，という Arthurian Legend を扱ったものである。

これら二作の中の waters に関する叙述の中で新に目立つものを拾うならば，凡そ次の如くである。

The Lover's Tale:

1. the sloping seas
   Hung in mid-heaven, and half-way down rare sails,
   White as while clouds, floated from sky to sky.
2. Oh, pleasant breast of waters, quiet bay, Like to a quiet mind in the loud world, Where the chafed breakers of the outer sea Sank powerless as anger falls aside.
3. a deep and stormy strait Betwixt the native land of Love and me.
4. the sail Will draw me to the rising of the sun.
5. dark-blue waters and narrow fringe Of curving beach.
6. the dappled dimplings of the wave, That blanch'd upon its side.
7. the tide Plashed, sapping its worn ribs.
8. The slowly-ridging rollers on the cliffs Cash'd calling to each other.
9. Down those loud waters, like a setting star,……the light house shone.
10. Gleams of the water-circles as they broke, Flicker'd like doubtful

smiles about her lips.

11. Thine image, like a charm of light and strength Upon the waters, push'd me back again On these beserted sands of barren life.
12. The great pine shook with lonely sounds of joy That came on the sea-wind.
13. as mountain streams Our bloods ran free.
14. The cleft and openings in the mountains fill'd With the blue valley and the glistening brooks.
15. A purple range of mountain-cones, between Whose interspaces gush'd in blinding bursts The incorporate blaze of sun and sea.
16. stream of gold……streak'd……With falling brook.
17. the wind Told a lovetale beside us, how he woo'd The waters, and the waters answering lisp'd To kisses of the wind.
18. echoes of the hollow-banked brooks.
19. the chillness of the sprinkled brook Smote on my brows, and then I seem'd to hear Its murmur, as the drowning seaman hears.
20. the muffled booming indistinct Of the confused floods.
21. Sometimes upon the hills beside the sea All day I watch'd the floating isles of shade.
22. anon the wanton billow wash'd Them over, till they faded like my love.
23. The hollow caverns heard me-the black brooks Of the midforest heard me.
24. The steepy sea-bank,……curving round The silver-sheeted bay:
25. Within the summer-house……Hung round with paintings of the sea, and one A vessel in mid-ocean, her heaved prow Clambering, the mart bent and the ravin wind In her sail roaring.
26. She drew it long ago Forthgazing on the waste and open sea.
27. and all at once, soul, life And breath and motion, past and flow'd away To those unreal billows:
28. A morning air, sweet after rain, ran over The rippling levels of the lake.
29. the surge fell From thunder into whispers:
30. a little silver cloud Over the sounding seas:

The Passing of Arthur:

1. Farewell! there is an isle of rest for thee.

2. And the long mountains ended in a coast Of ever-shifting sand, and far away The phantom circle of a moaning sea.
3. On the waste sand by the waste sea they closed.
4. A deathwhite mist slept over sand and sea:
5. thus over all that shore, Save for some whisper of the seething seas, A dead hush fell:
6. and with that wind the tide Rose, and the pale king glanced across the field Of battle:
7. only the wan wave Brake in among dead faces, to and fro Swaying the helpless hands, and up and down Tumbling the hollow helmets.
8. And rolling far along the gloomy shores The voice of days of old and days to be.
9. So all day long the noise of battle roll'd Among the mountains by the winter sea:
10. On one side lay the Ocean, and on one Lay a great water, and the moon was full.
11 thou rememberest how In those old days, one summer noon, an arm Rose up from out the bosom of the lake.
12. But now delay not: take Excalibur, And fling him far into the middle more:
13. and over them the sea-wind sang Shrill, chill, with flakes of foam.
14. He, stepping down By zig-zag paths, and juts of pointed rock, Came on the shining levels of the lake.
15. That whistled stiff and dry about the marge.
16. I heard the ripple washing in the reeds, And the wild water lapping on the crag.
17. Then went Sir Bedivere the second time Across the ridge, and paced beside the mere, Counting the dewy pebbles, fix'd in thought.
18. King Arthur's sword, Excalibur, Wrought by the lonely maiden of the Lake.
19. I heard the water lapping on the crag, and the long ripple washing in the reeds.
20. Seen where the moving isles of winter shock By night, with noises of the northern sea.
21. And brandish'd him Three times, and drew him under in the mere.
22. He heard the deep behind him, and a cry Before.

23. And on a sudden, lo! the level lake, And the long glories of the winter moon.
24. Then saw they how there have a dusky barge, Dark as a funeral scarf from stem to stern, Beneath them:
25. "Place me in the barge:" So to the barge they came.
26. if indeed I go (For all my mind is clouded with a doubt)—To the island-valley of Avilion; Where falls not hail, or rain, or any snow, Nor ever wind blows loudly; but it lies Deep-meadow'd, happy, fair with orchard-lawns And bowery hollows crown'd with summer sea.
27. So said he, and the barge with oar and sail Moved from the brink, like some full-breasted swan.
28. the hull Look'd one blach dot against the verge of dawn, and on the mere the wailing died away.
29. if he come no more—O me, be you dark Queens in you black boat.
30. he saw, the speck that bare the King, Down that long water opening on the deep Somewhere far off, pass on and on, and go From less to less and vanish into light.

以上を要するに，私は次のことを言わんとするものである。すなわち，Tennyson は徹頭徹尾 waters を愛した詩人であり，世間から「海洋の詩人」とさえ言われているが，この彼が物したその作品は，彼の少年時代からの放浪的旅行癖が産んだ産物であり，またこの旅行癖は彼の孤独を好む内攻的避社交性から来たものであり，更にまた，この避社交性は，彼の幼年・少年時代の大自然に恵まれた家庭生活環境が産んだものである故に，畢竟するところ，彼をして終世 waters を愛して waters に関する作品を数多産出せしめたその主因は，はるか遠く彼の幼年・少年時代の家庭環境にあった，と結論しようとするものである。